

## &lt;論文&gt;

# メキシコ・テオティワカン遺跡における居住空間の変遷 — 宮殿 3 の三次元測量の分析を通じて —

古賀優子  
(愛知県立大学大学院)

## 【要旨】

本論では、CAD を用いて、テオティワカンの住居建築のひとつである宮殿 3 の建築期とアクセサルトの変化を検討し、建造物および空間利用の変遷を分析した。

その結果、宮殿 3 には少なくとも大きく分けて 6 期、下位分類 2 期の合計 8 期あることが判明した。宮殿東側では床面の高さが一気に 4m 上昇し、西側では中庭の広さが 100% から最終的には 37% に減少した。また、宮殿内のアクセサルトを検討した結果、初期の宮殿はひとつの複合体として使用されていたが、後に東側と西側は隣接しながら異なる機能を担うようになり、直接的な関係が失われたと考えられる。壁画や石彫に注目すると、東側は複数の建築期に亘って鳥に関する集団が、西側にはジャガーと関わりのある集団が活動していたと推測される。

この分析を通じてデジタル三次元測量データと CAD を用いた空間分析の有用性、そしてテオティワカン全体の住居に見る社会変動を示すひとつの資料を提示する。

## 【キーワード】

テオティワカン、アパートメント式住居、宮殿 3、CAD 分析、アクセス  
Teotihuacan, apartment compound, Palace 3, CAD-analysis, access

## 【目次】

1. はじめに
  - 1-1. アパートメント式住居の先行研究
  - 1-2. 宮殿 3 の概略
  2. 宮殿 3 の三次元測量と建築期
  - 2-1. 宮殿 3 の建築期
  - 2-2. 宮殿 3 の年代と建築期
  3. 宮殿 3 の進入ルートと空間利用
  4. おわりに
-

## 1. はじめに

テオティワカンでは B.C.150 年頃から A.D.650 年頃まで繁栄し、一時は 10 万人を越える人口を抱えていたと言われる[Millon 1981: 208]。市民生活の場となっていたのはアパートメント式住居<sup>1)</sup>と呼ばれる複合住居施設であった。アパートメント式住居は郊外に建設されることが多いが、中心部にも「神殿」や「宮殿」と名づけられたアパートメント式住居が存在している。中でも「月の広場」の南西角に建てられた宮殿 3 (N4W1) [Millon 1973]は、当時のままの建物や壁画が多く残存している建築のひとつである(図 1)。政治と権力の中心である「月のピラミッド」と宮殿 3 は、「月の広場」を介して空間的につながっていた。その点で宮殿 3 は単に住居としてだけでなく、社会的にも重要な位置を占めていたと考えられる。

「月のピラミッド」発掘調査団<sup>2)</sup> (*Proyecto Pirámide de la Luna*、以下 PPL と略す) は、発掘調査と並行して、1999 年からトータルステーション<sup>3)</sup>による測量調査を開始した。これは、宮殿 3 を含めた「月の広場」全域の精密なデジタル三次元の図面の作成と、建築の変容およびテオティワカンの都市化プロセスの解明を目的としている。2002 年および 2003 年には宮殿 3 の測量を行ない、それまでに測量をした「月のピラミッド」や「月の広場」のデータと合わせて CAD 図化(三次元のワイヤーフレームおよび立体復元図)した。テオティワカンでは一世紀以上に亘り発掘調査が実施されているが、これまでデジタル形式の測量データを活用した三次元図面は作成されていない。トータルステーションによるデジタル測量データの利点は、従来の測量方法よりもはるかに高い精度のデータを獲得できるだけでなく、現場を離れても、必要に応じて元のデータから平面図や断面図、鳥瞰図を作成することができる点である。また、コンピュータ上で角度、距離計算や面積、体積を算出することができ、現場で直接計測できない場所の比較も可能である。さらに、修復保存されているが発掘データが不十分な遺構に対しては、現存する遺構からデータを獲得できるだけでなく、現場の観察と兼ね合わせて空間の分析をできる可能性を含んでいる。

この論文の研究対象である宮殿 3 も、40 年以上前に発掘・修復されているが、発掘データが不十分な建物のひとつである。そこで本論文では、CAD 図化した PPL の測量データを基に、宮殿 3 の建築の変遷と空間利用の変化に関する分析を試みる。まず始めに、宮殿 3 のデータと現場での観察をもとに同地区の建築期<sup>4)</sup>を復元する。そしてその建築期と、宮殿 3 内部への進入ルートの変化を照らし合わせることにより、宮殿 3 の建造物および空間利用の変遷を分析していく。この分析を通じて、デジタル三次元測量と CAD データを使用した空間分析の有用性、そしてテオティワカン全体の住居に見る社会変動を表わすひとつの資料を示すことができると考える。

### 1-1. アパートメント式住居の先行研究

テオティワカンでは、パトラチケ (Patlachique) 期から既に集落が建設されていたが、「ケツアルコアトルの神殿」の東側にある「北の神殿」および「南の神殿」を除いて、トラミミロルパ (Tlamimilolpa) 期以前 (~A.D.200 年) にアパートメント式住居が存在していたかどうか明らかでない[Rattray 1997: 7] (表 1)。テオティワカン盆地プロジェクトの一環でサンダース (William Sanders) が 1961 年に調査したクアナラン (Cuanalan) はトラミミロルパ期以前の住居であるが、トラミミロルパ期以降に比べて簡素な造りである。規格はなく、床の基礎部は粘土質の土や

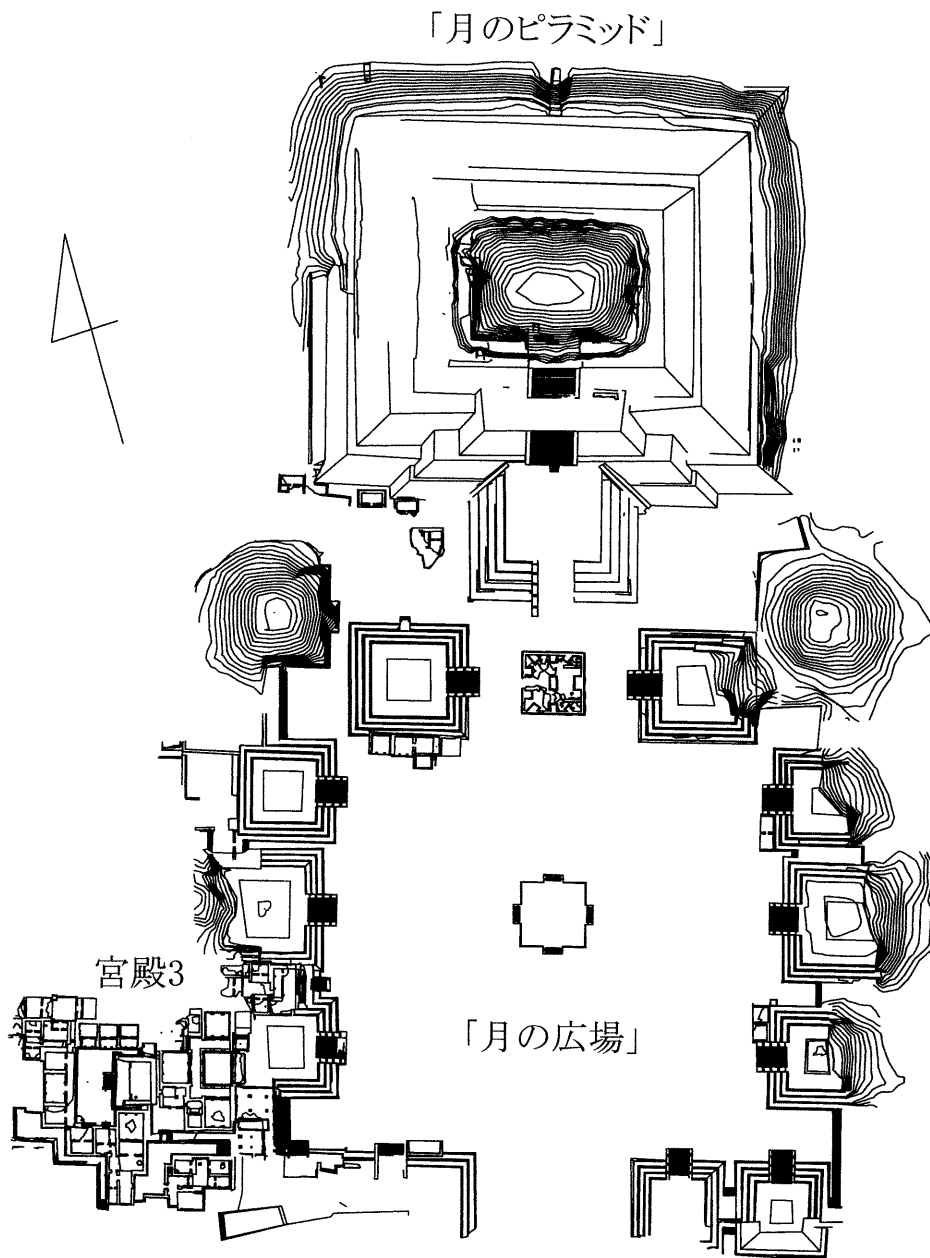


図1 「月の広場」と宮殿3

表 1 テオティワカン年表 (Millon 1973 Fig.12 より引用)

		Table of Concordances			
		Phase Names <sup>1</sup>	Phase Numbers <sup>2</sup>		
LATE HORIZON	A. D. 1500	Teocalco	Aztec IV		
	1400	Chimalpa	Aztec III	POST-	
	1300				
	1200	Zocango	Aztec II	CLASSIC	
SECOND INTER-MEDIATE PERIOD	1100	Mazapan	Mazapa		
	1000			PERIOD	
	900	Xometla	Coyotlatelco	900 A.D.	
	800	Oxfofcapac	Proto-Coyotlatelco		
MIDDLE HORIZON	700	METEPEC	Teotihuacán IV	CLASSIC	
	600	T E O XOLALPAN	Late Early	Teotihuacán IIIA Teotihuacán III	
	500			PERIOD	
	400	T I TLAMIMILOLPA	Late Early	Teotihuacán IIA-III Teotihuacán IIA	
	300			300 A.D.	
	200	U A MICCAOTLI		Teotihuacán II Teotihuacán IA	
	100	C TZACUALLI	Late Early	Teotihuacán I	
	A.D. B.C.	A N PATLACHIQUE		Chimalhuacán * Proto-Teotihuacán I	
FIRST INTER-MEDIATE PERIOD	100			PERIOD	
	200	Terminal Cuauanalan; Tezoyuca	Cuicuilco *	LATE	
	300	Late Cuauanalan	Ticoman III *	PRE-CLASSIC	
	400	Middle Cuauanalan	Ticoman II *	PERIOD	
	500	Early Cuauanalan	Ticoman I *	MIDDLE	
	600		Middle	PRE-CLASSIC	
700	Chiconauhtla	Zacatenco *	PERIOD		
B. C. 800					

<sup>1</sup> Phase names used by personnel of Teotihuacán Mapping Project (Millon and others) and by personnel of Valley of Teotihuacán Project (Sanders and others).

<sup>2</sup> Phase numbers used by personnel of the Proyecto Teotihuacán, of the Instituto Nacional de Antropología e Historia (see Acosta 1964: 58-59).

\* Pre-classic phases elsewhere in the Valley of Mexico.

NOTE: The absolute chronology shown is that used by the Teotihuacán Mapping Project. Terminology for the Teotihuacán phases is based on the Armillas classification (1950) with modifications.

TEOTIHUACAN MAPPING PROJECT  
UNIVERSITY OF ROCHESTER

J. A. Cerdo

RENÉ MILLON  
9/64  
REVISED 5/70

陶土、多孔質の火山岩を使用し、壁は日干しレンガやブロック状の土を固めて造られていた [Sánchez 2000: 91]。

ツァクアリ (Tzacualli) 期には人口は大きく増加し、約 8 万人に達したと考えられている [Millon 1981: 221]。さらにトラミミロルパ期に入ると、都市全体の建物が計画的に造られるようになり、大きさや様式が規格化されたアパートメント式住居が都市の至る所に建設された。アパートメント式住居内部は、メイン・パティオ<sup>5)</sup>を中心にして、その周囲に部屋やポーチを配するというパターンが一般的になった。テティトラ (Tetitla)、サクワラ (Zacuala) [Séjourné 1966]、トラミミロルパ [Linné 1942]などの住居がこの時期に建設されたと考えられている [Rattray 1998: 264]。これらの発掘により、郊外、特に中心部の西側にあるアパートメント式住居の多くが、60m×60m という規格

に従って建設されていることが明らかになった（図 2）。この規格のアパートメント式住居には、60 人から 100 人程度が住んでいたと考えられる[Millon 1973: 45, 1981: 206]。また、この規格と異なる大きさのアパートメント式住居も発掘されており、小規模の住居は 20 人や 50 人程度の住人を抱えていたと推測される[Millon 1970: 1080]。

一方中心部のアパートメント式住居は、郊外で見られるような外枠の規格がないものの、住居内のレイアウトは郊外に建設されたものと類似している。宮殿 3 は複合体<sup>6)</sup>であるが、内部はアパートメント式住居と同様に部屋や中庭があり、テオティワカン研究ではアパートメント式住居として扱われている。住居の中には、ヤヤワラのように住居としての機能以外に、行政の役割を果たしていたと考えられている空間もある[Millon 1976: 225; Spence 1994: 381]。ひとつのアパートメント式住居は、さらにその内部が部屋や中庭が集合したユニットに分かれており、ひとつのアパートメント式住居の中にはおよそ 10 から 15 のユニットがあったと推定される[Sanders 1967: 124]。

アパートメント式住居からは、土器や石器、儀式用の香炉等が出土している。マンサニージャ（Linda Manzanilla）によれば、植物遺残にはトウモロコシやマメ類、カボチャ類やトマトなど共通するものも多いが、タバコやアボカド、綿など、テオティワカンにとって外来種となる植物遺残には差が見られるという。これは、アパートメント式住居が工房として機能し、またそこで儀式用の物の取引が行なわれていたことを裏付けるものと考えられている[Manzanilla 2004: 131-132]。テオティワカンではこの他にも、部屋の大きさ、空間の使い方や装飾、建築技術、墓の副葬品などを基準として、アパートメント式住居同士の格差を指摘することができる[Manzanilla 2004: 128]。例えばミロン（René Millon）は、テオティワカンには 6 つの社会階層があったと主張する[Millon 1981: 214]。マンサニージャも基本的にミロンの主張を受け入れているが、それに加えて最下層をもうひとつ補足している[Manzanilla 2004: 129]。彼らによれば、もっとも高い地位を占めたのが支配者層で、その下に神官層、その次には非エリート層である中間層が 3 層続く。中間層は主として手工業生産に携わっていた。中間層の中での線引きは主に住居の広さに依存しているものの、具体的に基準が示されておらず、やや曖昧である。その後是最下層がくる。支配者層・神官層の住居と考えられているのが「ケツアルパパトルの宮殿」や「太陽のピラミッド」西に隣接する宮殿、そして「ケツアルコアトルの神殿」東側の宮殿である。いずれの住居も都市中心部に位置し、巨大なモニュメント建築に隣接している。郊外のアパートメント式住居の大半は中間層のものであったと推測されている。住居の中には、黒曜石や土偶の工房などもあり、それぞれのアパートメント式住居ごとに、異なる生産活動を行っていた[Gómez 2000; Manzanilla 1993, 2004; Millon 1973, 1981; Muñera 1991]。

このように、アパートメント式住居は場所によって生活、仕事、行政、儀式など、あらゆる役割を兼ねていたと考えられる。それぞれの住居の機能を研究するには、出土品や壁画・石彫のモチーフと同時に、建築物の空間構成を分析する必要がある。従来の平面図や側面図、断面図では建築物の高低差や角度を容易に比較できない。この問題を解消する一つの方法として、三次元座標データを使用した CAD 分析を利用する。

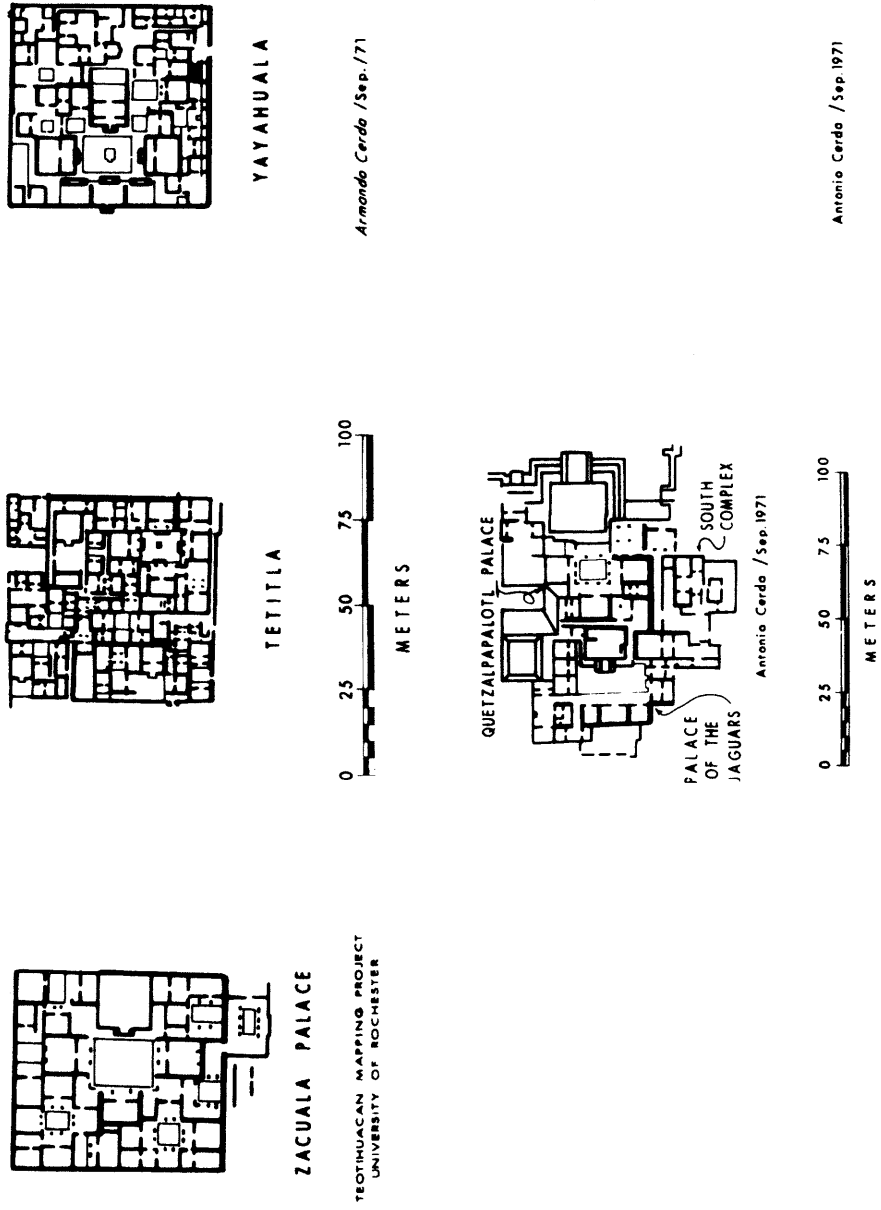


図2 アパートメント式住居 (Millon 1981 Fig. 7-4, 7-5 より引用)

## 1-2. 宮殿3の概略

宮殿3は、「死者の大通り」の北端にある「月の広場」の南西角に位置している。この建物は、大きく分けて4つの部分から構成される。東側には「ケツアルパパロトルの宮殿」、その下には「羽毛の生えた巻貝の神殿」を中心とする下層建造物群（以下「羽毛の生えた巻貝の神殿」群と称す）、南側には「南のコンプレックス」、そして西側には「ジャガーの中庭」を中心とするジャガー・コンプレックスがある（図3）。宮殿3は、「月の広場」周辺の建物の中でも、特に数多くの建物や壁画が当時のまま残存している場所である。さらに現在、過去の発掘によって古い時期の建物と新しい建物が並存しているため、地表観察や測量によって建物の通時的変化を追うことができる場所でもある。

宮殿3はメキシコ政府のテオティワカン・プロジェクト<sup>7)</sup>の一部として発掘された。発掘を担当したアコスタ（Jorge Acosta）が1964年に出版した報告書[Acosta 1964]は、「ケツアルパパロトルの宮殿」の発掘・修復についての詳細を記している。しかし、「羽毛の生えた巻貝の神殿」群は主に盗掘坑から発見された建造物の存在について触れている程度である。また、ミュラー（Florencia Müller）が、同プロジェクトの調査で出土した「ケツアルパパロトルの宮殿」と「羽毛の生えた巻貝の神殿」群の土器分析を実施している[Müller 1978]が、それ以外の部分、即ち「ジャガーの中庭」および「南のコンプレックス」については、現在までに刊行されている資料はわずかである。このような背景から、これまでの宮殿3に関する研究は主に「ケツアルパパロトルの宮殿」を中心に進められてきた。

壁画に関する研究や記述は比較的多く行なわれてきた[Carballo 2005; De la Fuente 1995; Kubler 1984; Lombardo De R. 1995; Miller 1973; C. Millon 1972; Von Winning, 1987]。しかしながら、図像研究が主流であり、宮殿3の空間や建築と壁画との関連を論じた研究は、モランテ（Rubén Morante L.）による「ケツアルパパロトルの宮殿」の建築と天体の運行、イコノグラフィーを組み合わせた研究[Morante L. 2002]や、サロ（Patricia Sarro）による石彫と空間の関係に注目した研究[Sarro 1991]があるに過ぎない。また建築研究では、ホプキンス（Mary Hopkins）が、通路から中庭までの距離など複合住居内の空間使用を数値化し、それぞれの住居の機能について比較・分析している[Hopkins 1987]。

このように、宮殿3の研究、特に「ジャガーの中庭」や「南のコンプレックス」の研究はほとんど進められていない。これは報告書や図面などの資料が少ないことに起因していると考えられる。このような資料不足の場合でも、遺構が発掘済みで、なおかつ露出していれば、CADは、トータルステーションによる三次元座標測量で収集されたデータを取り込むことにより、現場では計測不可能な距離や角度計算、高低差などを分析することができるのである。次章では、PPLの三次元測量による新しいデータから作成したCAD図と現場での観察を合わせ、宮殿3の空間利用分析の基礎部分となる建築期について記述する。

## 2. 宮殿3の三次元測量と建築期

本論文では、現場での観察をもとに、増改築跡また建築方法に着目して前後関係を明確にすることで、建築空間の変遷を明らかにする。ここで示す建築期は建造物の年代を直接示すものではない

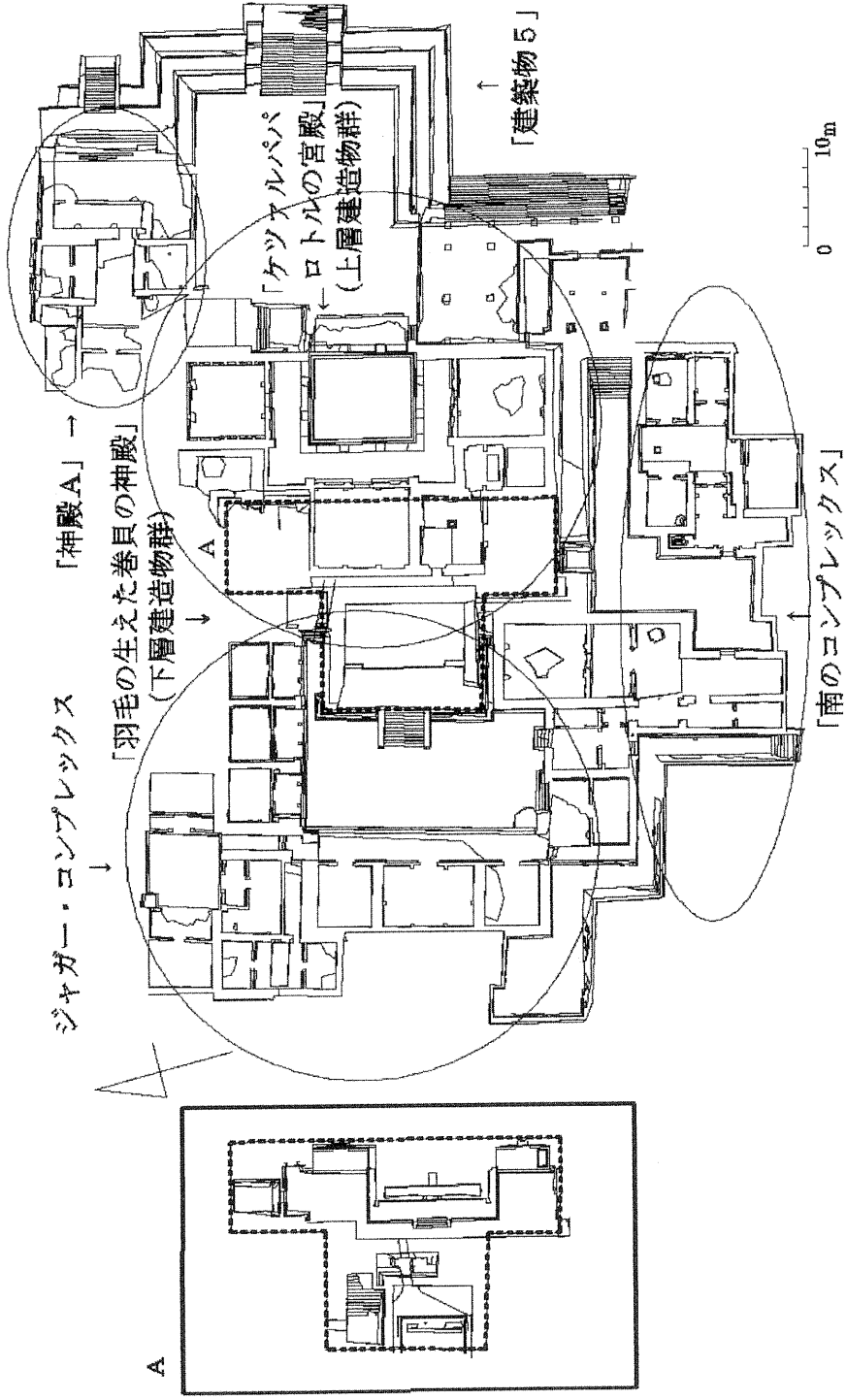


図 3 宮殿 3 全体図 (欄外 A は「羽毛の生えた巻貝の神殿」群)



い。しかし、この建築期とミュラーの土器編年を組み合わせることによって、おおよその年代を知ることが可能であると考えられる。

一方、PPL では、トータルステーションを使用し、マッピング・プロジェクト<sup>8)</sup>の0地点を基点として三次元座標を測量した。建築期は、新たな建物の付加を基準に認定した。宮殿3では、床面や壁面の部分的造り替えのような小規模な改築は比較的頻繁に行なわれたが、新築や建築レイアウトの大幅な変化を伴わない場合には、ひとつの建築期として認定していない。ただし、部分的に増築が行なわれていたと考えられる場合は、同一の建築期で下位分類をしている。この方法で得られたデータを基に、同地区で確認された6期の建築期について記述する。なお本論文で使用している宮殿3内の名称は筆者が便宜上付けたものであり、先行研究とは一致しない。

## 2-1. 宮殿3の建築期

### ・第I期 (図4)

これまで刊行された公式の報告書には記述されていないが、測量の際に下層建造物1<sup>9)</sup>の南西側では、北に向かって掘られたピットが偶然発見された。ここからは、現在露出している床面よりも低いレベルで床面が確認された。下層建造物1に対応する現在の床面よりも低いレベルに建築物の一部があることから、それ以前に別の床面が存在したと推測される。また下層建造物3に約2m×1mのピットが掘られているが、そこでも下層建造物3より下に床面が確認できる。よってこれらの床面の建築時期を第I期とする。

### ・第II期 (図5)

第II期に入ると、「羽毛の生えた巻貝の神殿」群が建設された。この建物に対応する床面は「ジャガーの中庭」まで広がっていたと考えられる。「ジャガーの中庭」は宮殿3のメイン・パティオにあたり、この時期にはすでにメイン・パティオを囲む構造が出来上がっていたと考えられる。

「ジャガーの中庭」の北側には3つのポーチと部屋が並んでいるが、第II期にはポーチ2と部屋2の東側に別の建物があったと考えられる。1964年に撮影された下層建造物6の西側の写真には、一段上がった床面と斜めの壁が確認でき、ここにもう一つポーチか部屋、あるいはその両方が存在していたと推定される(図5中のポーチ2'、部屋2')。

「羽毛の生えた巻貝の神殿」の下層建造物4の東側では、別の部屋あるいは空間への入口が発見された(1960年代の名称は「下層建造物II」)。下層建造物IIは、アコスタらによって「ケツァルパパロトルの宮殿」の中庭3の盗掘坑<sup>10)</sup>からその一部が発見された。しかし、「ケツァルパパロトルの宮殿」崩落の危険性から発掘を断念したため、規模は不明である。だが、下層建造物4の東には建築物5があり、第II期の時点ではまだ建築物5が完成していなかったか、現在よりも小規模のものであったと考えられる。

### ・第III期 (図6)

引き続き「羽毛の生えた巻貝の神殿」群は使用され続けるが、「ジャガーの中庭」の中央部に祭壇が設けられた。テオティワカン建築では、通常先にタルー<sup>11)</sup>を造ってから床を敷くため、「羽毛の生えた巻貝の神殿」と同時期に建設されたならば、祭壇に対応する床面は祭壇のタルーで終わっ

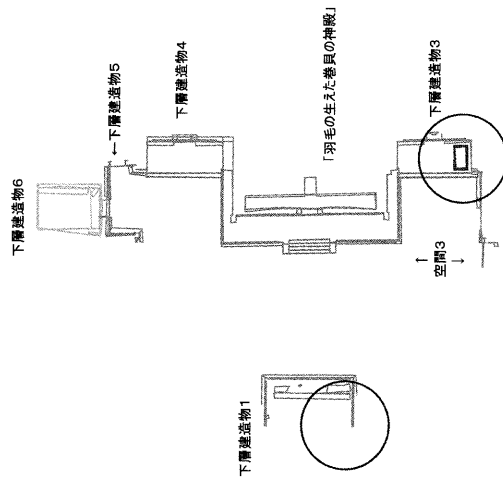
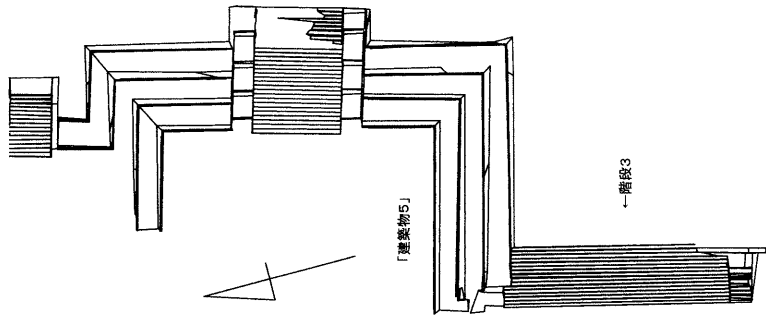


図4 第I期 (円で囲まれた部分)

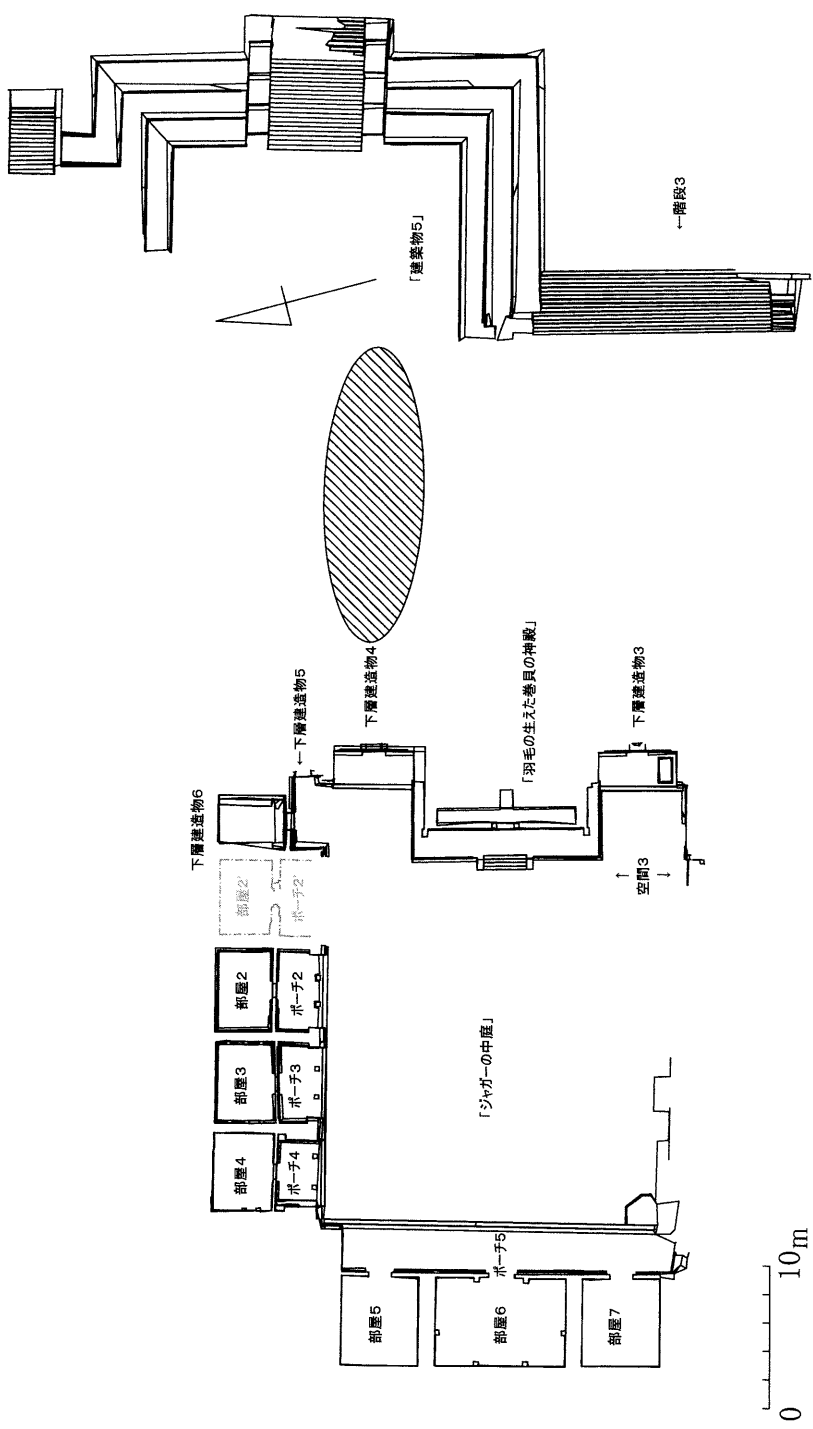


図5 第Ⅱ期（破線で囲まれた部屋2'、ポーチ2'は測量データに基づく推定による復元。  
また、斜線部は下層建造物Ⅱがあると推測される場所を示す。）

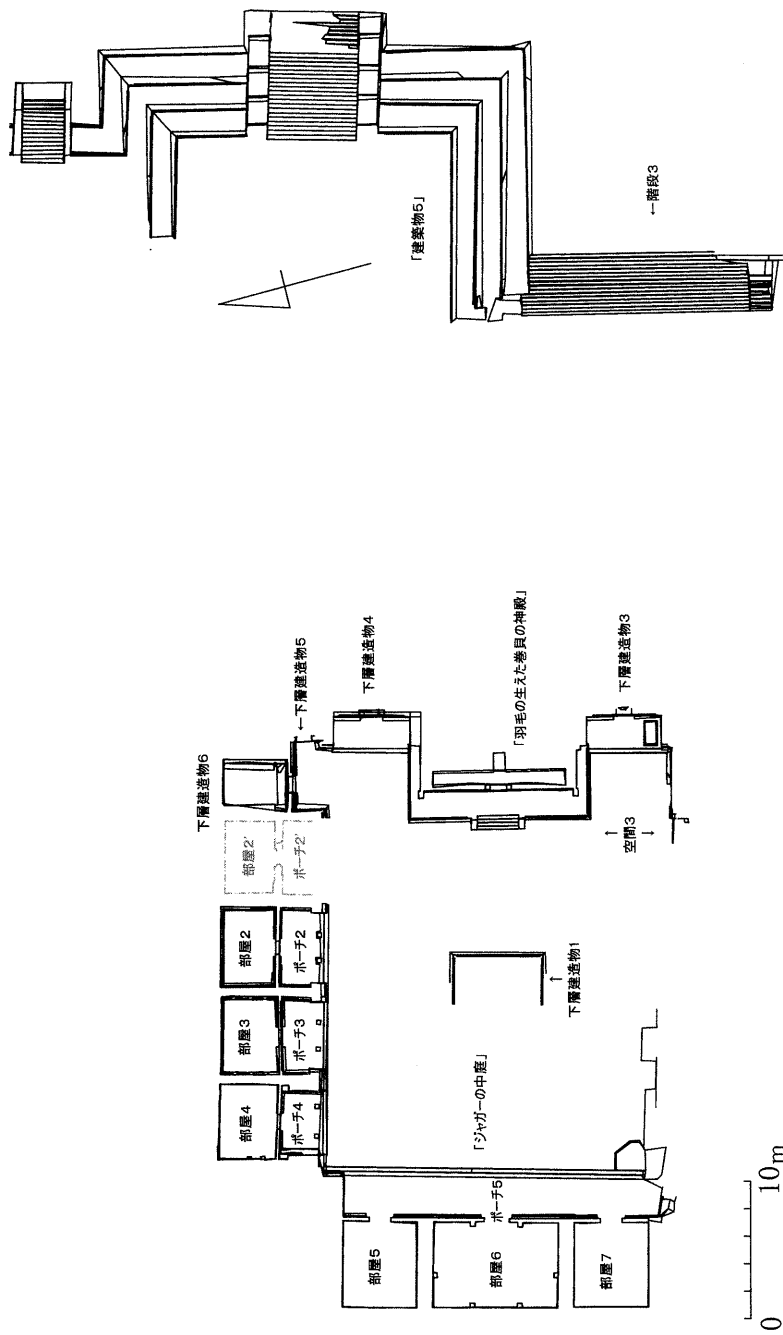


図 6 第Ⅲ期

ているはずである。しかしここでは、床が祭壇の下に潜り込んでいる。したがって「羽毛の生えた巻貝の神殿」からつながる床面は祭壇と同時期に造られたものではないと考え、第Ⅱ期とは別の時期に比定している。第Ⅲ期の祭壇上は水平な床面が確認できるだけであった。空間の配置から、この祭壇は儀式用の祭壇としてメイン・パティオの中心に建設されたと推定できる。

#### ・第Ⅲ-A 期

第Ⅲ期の祭壇上部の床面に、垂直に立つ壁面が認められる。現在では東面の中心部から南側にかけては検出できるが、北側には見られない。祭壇上部を一段高くした、あるいは壁を造ったのではないかと推測される。この垂直面は次の時期の建物によって切られていた。

#### ・第Ⅳ期（図 7）

第Ⅳ期には宮殿 3 の東側にあった第Ⅲ期の建物が埋められ、新たな建物が建設された。祭壇は床で覆われ（空間 1）、空間 1 の外部にはタルー・タブレロ様式の壁が造られた。またその東側にも、Ⅱ期からⅢ-A 期まで機能していた「羽毛の生えた巻貝の神殿」群とそれに隣接する建造物のほとんどを覆う斜めの壁が造られたことから、この時点で「羽毛の生えた巻貝の神殿」群の機能は失われていたと考えられる。「羽毛の生えた巻貝の神殿」群の上部には新たに「ケツアルパパロトルの宮殿」が建設された。

「ケツアルパパロトルの宮殿」は建築の上でジャガー・コンプレックスと直接関係付ける材料がないが、これらの建造物は最終的には同時に使用されていた。第Ⅳ期に「羽毛の生えた巻貝の神殿」群が埋められることによって初めて「ケツアルパパロトルの宮殿」が建設可能になることから、第Ⅳ期より遡ることはなく、従って第Ⅳ期に位置づける。

この時期までには、石柱で囲まれた「ケツアルパパロトルの宮殿」の中庭 3 は、ほぼ現在の形に整えられたと推定される。「ケツアルパパロトルの宮殿」とジャガー・コンプレックスとの間には、両者を分離する通路（空間 6）が確保されることから、これらは互いに切り離された、別個の建築群であったと考えられる[Acosta 1964: 37]。宮殿 3 の西側では、第Ⅲ期で使用されていた「ジャガーの中庭」が引き続き使用されており、図 7 中央の破線を挟んで、東側と西側には 4m 以上の高低差が生じている。

#### ・第Ⅳ-A 期

Ⅳ-A 期には、空間 1 の床面が張替えられただけでなく、外部東面のタブレロの凹部分、いわゆるパネル部分も埋められた。また、空間 2 の南側は床面が 40cm ほど上に張替えられ、その下に用水路が作られた。

#### ・第Ⅴ期（図 8）

第Ⅴ期になると空間 1 の北側に階段が造られた（階段 1、2）。階段 1 はポーチ 2 の半分以上を覆っており、ポーチ 2 と部屋 2 はこの時期以降機能しなくなった可能性が高い。階段 1 は今日壁を隔てて北側に残されているもうひとつの階段（階段 2）とつながっていたと推定される。階段 2 の上部には新たに部屋状構造物（部屋 13）が建設されたが、現在残っている高さ 1m の壁を考慮する

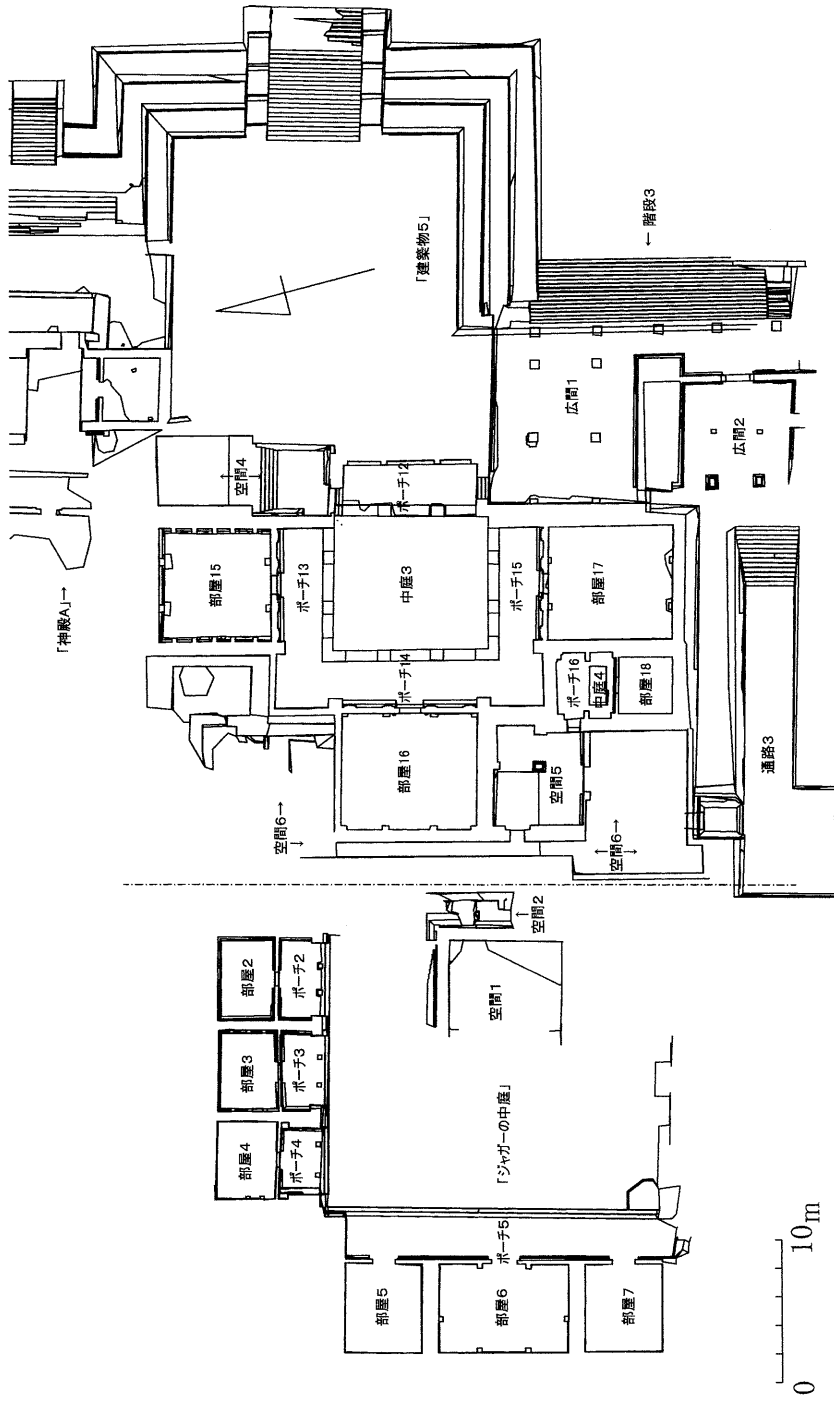


図7 第IV期（破線を境に東側が高くなっていく。）

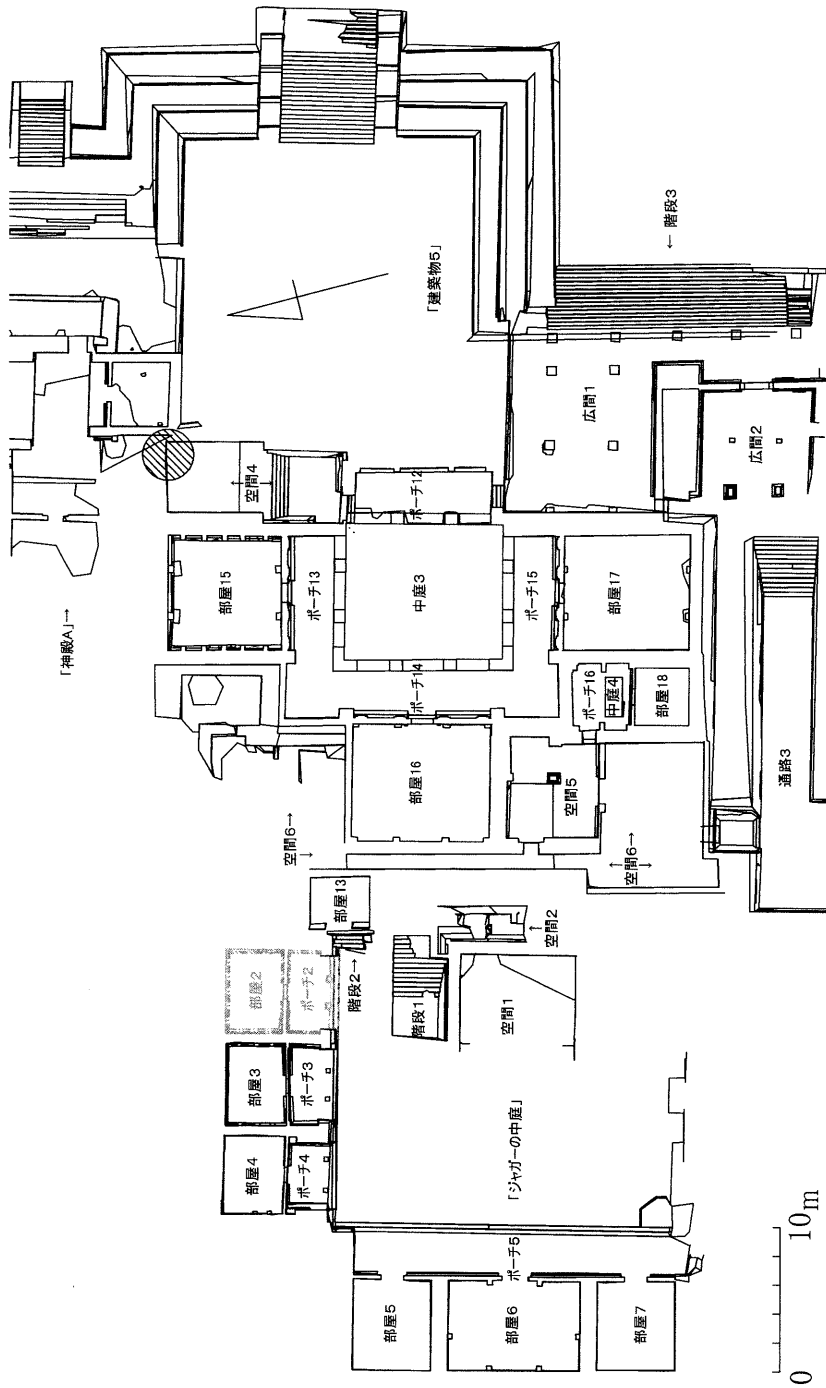


図8 第V期（斜線部は「神殿A」への入口跡を示す。）

と、どのようにして階段からアクセスしたのか不明であり、今後更なる分析が必要である。

また、「ケツアルパパロトルの宮殿」では、北東角（空間 4）にあった「神殿 A」への入口が閉鎖され、往来可能なアクセスは南東、北西、南西の 3 つになった。

#### ・第VI期（図 9, 10）

第VI期になると、第V期の空間 1 の西側を埋めるようにして、基壇状の建造物 1 が建設された。建物の上部はポーチと部屋がひとつずつあるだけである。ジャガー・コンプレックスは、実際にはさらに早い時期から使用されていた可能性も否定できないが、それを裏付ける証拠はない。また、ジャガー・コンプレックスのそれぞれの部屋では、床、壁或いはその両方の張替えが認められるが、大きな増改築ではないため、これらは第VI期に含めることにする。

「ケツアルパパロトルの宮殿」では、第V期まで利用されていたポーチ 14 の北側入口、南側入口がそれぞれ丁寧に閉鎖された。閉鎖後はモルタル漆喰を塗って壁画が施され、そこに入口があった痕跡は覆い隠された。

## 2-2. 宮殿 3 の年代と建築期

次に、宮殿 3 の年代を検討する。宮殿 3 の編年に関しては、アコスタが提示する放射性炭素式年代測定法による絶対年代と、ミュラーの土器分析による年代がある[Acosta 1964: 52-58]。アコスタは、「ケツアルパパロトルの宮殿」への入口である広間 1 と、中庭 3 に面する部屋 15 から出土した木片の放射性炭素年代を算出している。サンプル計 4 点からは、A.D.50～250 年という年代が得られた（図 11）。アコスタ自身が述べているように、この分析から導き出された絶対年代は土器による相対年代よりもはるかに古いものであった。先にも述べた通り、テオティワカンでアパートメント式住居が本格的に建設されるようになるのはトラミミロルパ期以降である。また A.D.50 年には「月のピラミッド」の建築が開始されていない。したがって、仮に宮殿 3 がツァクアリ期の時点で既に機能していたとするならば、都市が計画性を持つようになるトラミミロルパ期以前に、既にアパートメント式住居が、「月の広場」の一部として存在していたことになる。またサンプルの中で年代に幅があるため、このデータは信頼性に欠けると考える。年代の差が生じる原因としては古木効果<sup>12)</sup>や木材の再利用、試料汚染などの要素が考えられるが、それを特定することはできない。

1978 年にはミュラーが、テオティワカン・プロジェクトで出土した土器や副葬品の分析結果をまとめた。それによると、「羽毛の生えた巻貝の神殿」はテオティワカン II-a 期（A.D.200-300 年）、「羽毛の生えた巻貝の神殿」群を覆った第IV期がテオティワカン II-a-III 期（A.D.300-450 年）、床 2 と 3 の間がテオティワカン III 期（A.D.450-550 年）、床 1 と 2 の間がテオティワカン III 期と III-a 期（A.D.550-650 年）である[Acosta 1964: 58]（図 12、図 13）。図 13 と照らし合わせると、宮殿 3 が長期間に亘り使用されていたことが分かる。出土した土器の数は不明であるが、ほとんどの建物がテオティワカン III 期以前の土器を含んでいる。宮殿 3 の中で、現在のところ古い土器はテオティワカン II 期（A.D.150-200 年）のものであるが、建物の内部ではなく、入口を塞ぐ埋め土の中から出土したものである。しかし土が搬入された際に、古い年代の土器を含有していた可能性もあるため、出土したテオティワカン II 期の土器が建物の年代を反映するものか、さらに分析を要する。



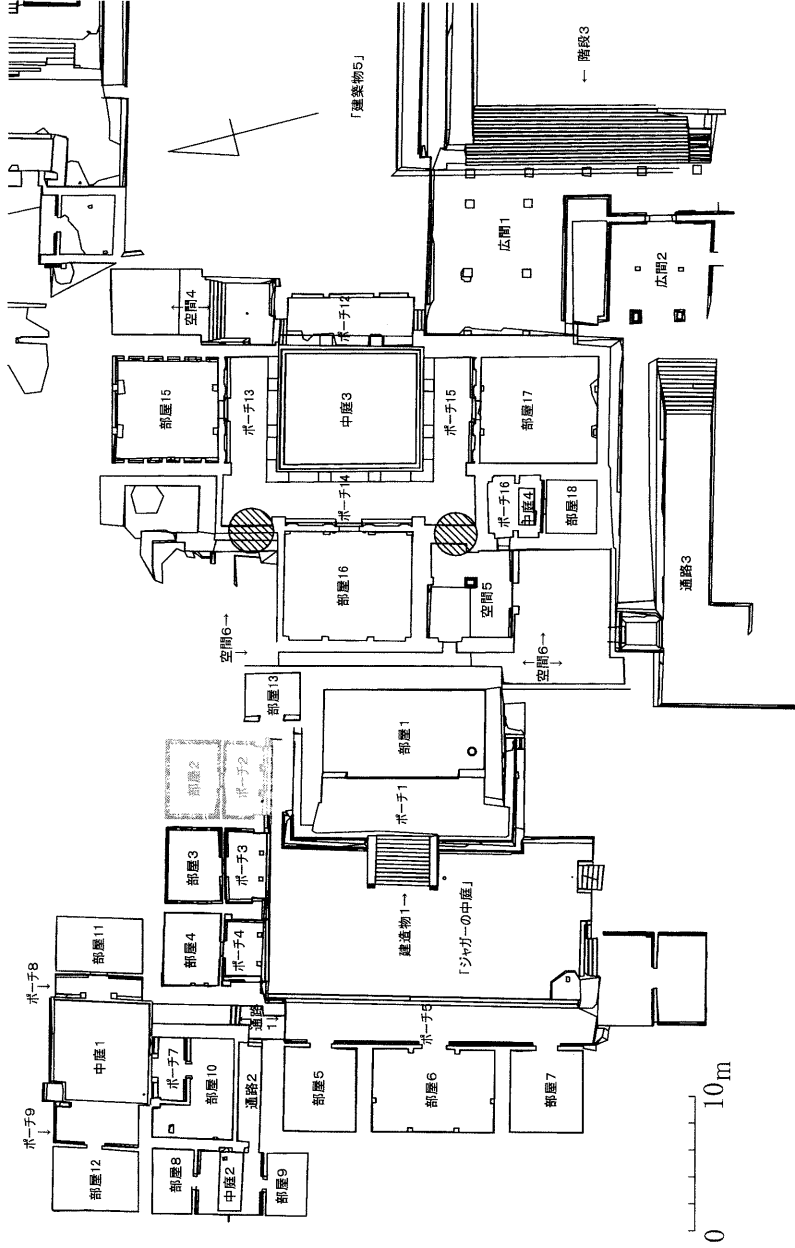


図9 第VI期（斜線部はポーチ14の北側入口と南側入口跡を示す。）

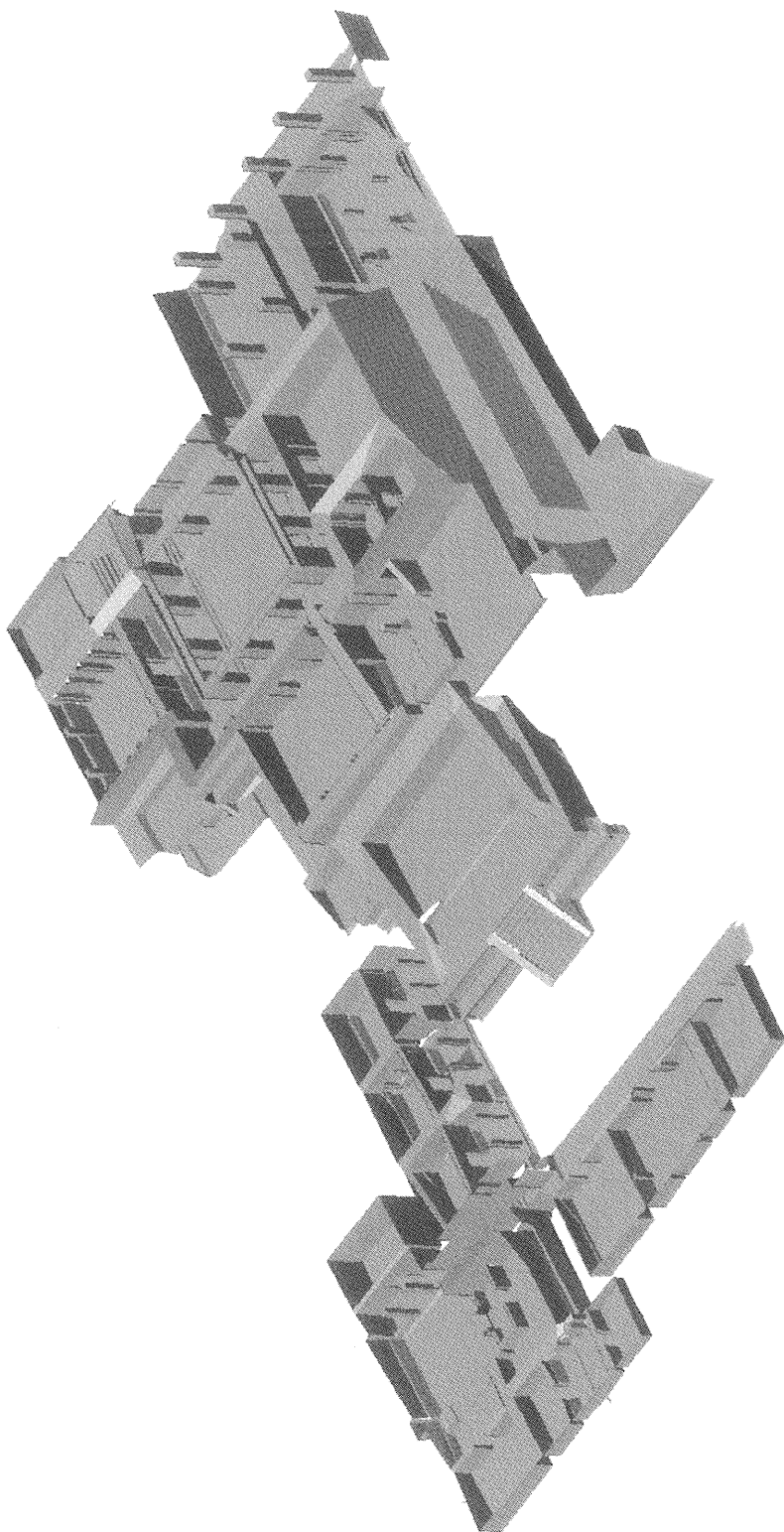


図 10 宮殿 3 の 3D 復元図 (第VI期)

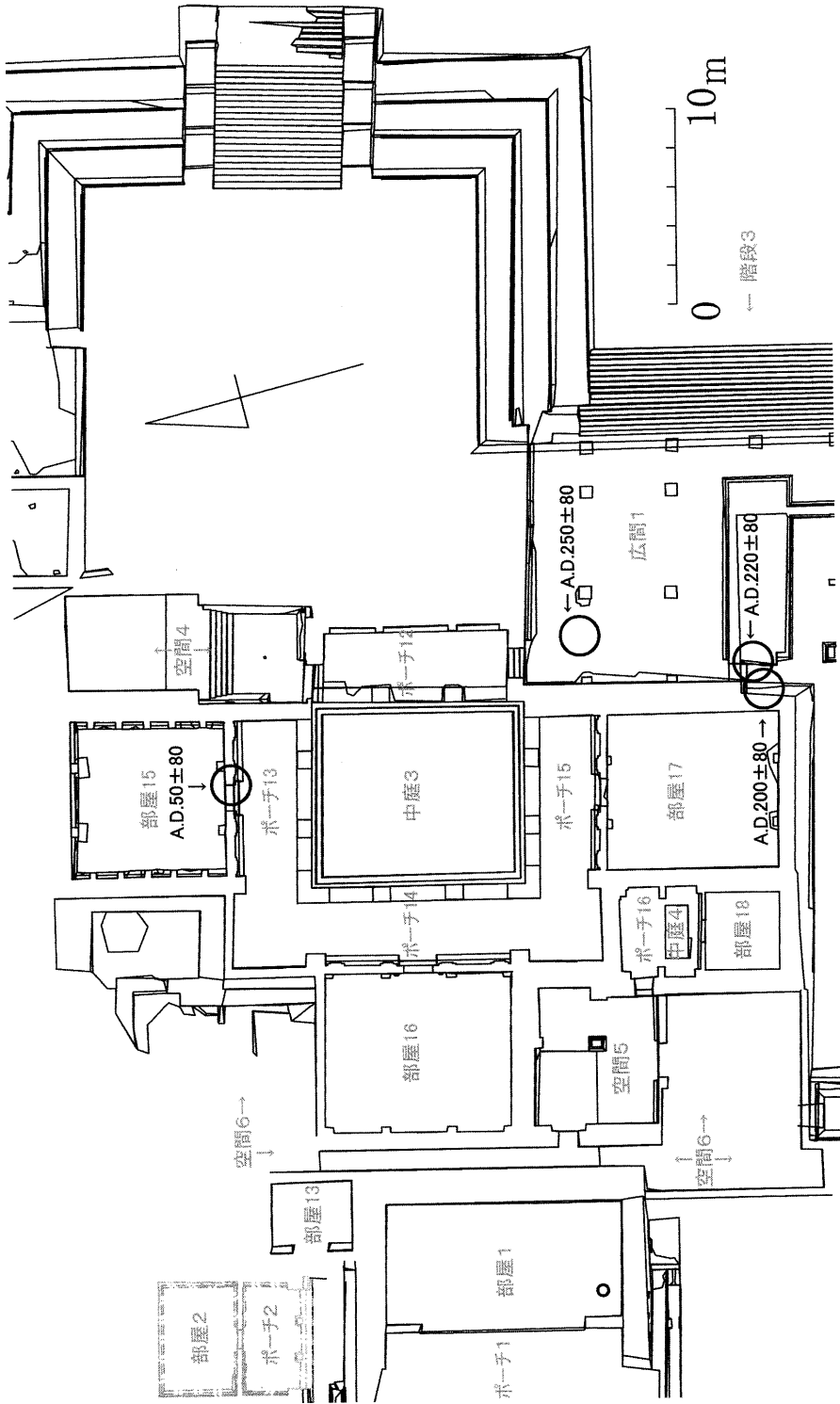


図 11 放射性炭素式年代測定法による分析対象となったサンプルの出土場所

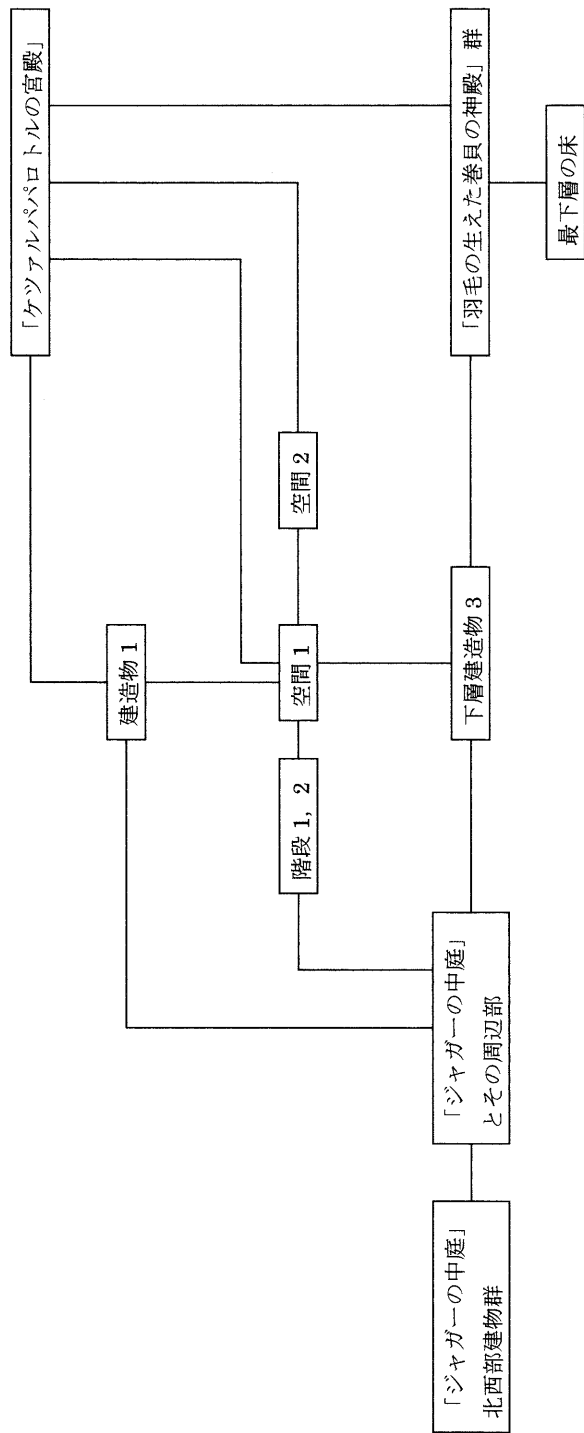


図 12 宮殿 3 の層位関係図

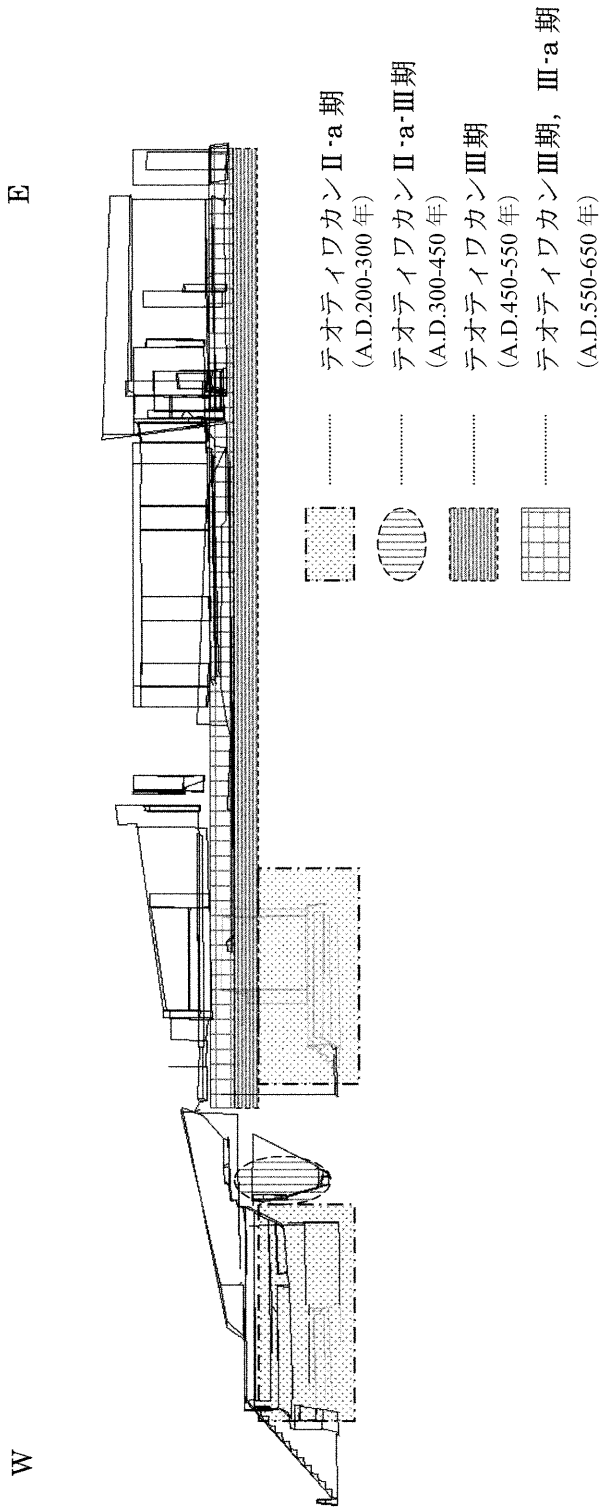


図 13 土器形式に基づいた宮殿 3 の建設時期

### 3. 宮殿3の進入ルートと空間利用

宮殿3をCAD分析した結果、宮殿3は第IV期から廊下を隔てて大きく二分されたことは既に述べた。それでは、二分されたそれぞれの建造物群、すなわち「ケツアルパパロトルの宮殿」の位置する東側と、「ジャガーの中庭」を擁する西側は、それぞれどのような空間を構成していたのだろうか。ここでは宮殿3への進入ルートから、空間利用の違いとその変化を分析する。

サロは、「ケツアルパパロトルの宮殿」へのアクセスが、時代を追うごとに制限されていったと述べている[Sarro 1991: 258]。一方モランテは、階段3があることから、アクセスの制限は他のアパートメント式住居と比べて厳しくないことを指摘しつつ、宮殿3が政治に関わる公的空間であった可能性を挙げている[Morante 2002: 217]。「ケツアルパパロトルの宮殿」の中庭3へのアクセスは、①神殿Aに通じる北東口ルート、②空間6北側からポーチ14にある入口を通る北西口ルート、③空間6南側から空間5を抜けて、ポーチ14の南側にある入口を通る南西口ルート、そして④広間1からポーチ12を通過する南東口ルートの4つである(図14)。4つのルートのうち、北東口(空間4)に入口を塞いだ痕跡が残っている。ポーチ14の北側入口および南側入口も、それぞれ最後の建築期になる前に封鎖された。通常テオティワカン建築で戸口を閉鎖するときは、ブロック状の石を積み上げるか、通常の建築過程と同様に土や日干しレンガとコンクリートで壁を作り、それをモルタル漆喰で覆う。封鎖後は途中で閉鎖された箇所にも周囲と同じ壁画が施されるため、見た目には判別できない。南東ルートの入口も最終的に封鎖された[Acosta 1964: 63]が、土と石を雑に積み上げただけで、壁表面はモルタル漆喰で覆われておらず、他の戸口に比べて封鎖が粗雑であった。

このような進入ルートの封鎖時期は、都市の破壊行為が行なわれた時期と一致するのではないかと考えられている。中でも、緊急に封鎖されたと見られる入口は宮殿3だけでなく、アパートの入口や「死者の大通り」沿いの建物からも報告されている[杉山 2001: 13]。同様に、メテペック期には、「シウダデラ」にある「北の宮殿」が閉鎖されていた[Jarquín and Martínez 1982: 42, Lám.19]。これまでのところ、都市の破壊は都市全体で行なわれたわけではなく、むしろ彼らのイデオロギーに関する政治・宗教の中心的機能を果たす神殿やアパートメント式住居を狙って火を放つという形で行なわれたと考えられている。郊外型のアパートメント式住居で火災の跡が認められたのは、965ヶ所のうちのわずか5%に過ぎないが、「死者の大通り」沿いの建築群では、確実なものだけでも147ヶ所の火災跡が発見されている[Millon 1988: 149-50]。「ケツアルパパロトルの宮殿」でも火災の跡が確認されている[Acosta 1964: 25]。これは「ケツアルパパロトルの宮殿」が政治的な機能を果たしていた可能性を示唆している。

「ケツアルパパロトルの宮殿」の中央部には、彫刻の施された石柱が並んでいる。「太陽のピラミッド」の西側や、「ケツアルコアトルの神殿」、「羽毛の生えた巻貝の神殿」といった、都市の中でも比較的早い時期に建設された建物には石彫が存在するが、テオティワカン後期になると装飾は石彫から壁画へ移行した。サロは、時代の変化と共に、人びとの建築に関する関心は、建物の外面、公的空間の強調から、内部、私的空間の装飾へと変化していったと指摘する。[Sarro 1991: 261]。また、最初に広い入口を構えて、ロビーのような空間の奥に狭い入口を設けるといった入口の建築様式は、石彫を伴うテオティワカン初期の建物に多く、テオティワカン後期になると、壁画への移行により、ほとんど見られなくなる。その中で「ケツアルパパロトルの宮殿」は、「月の広場」に面

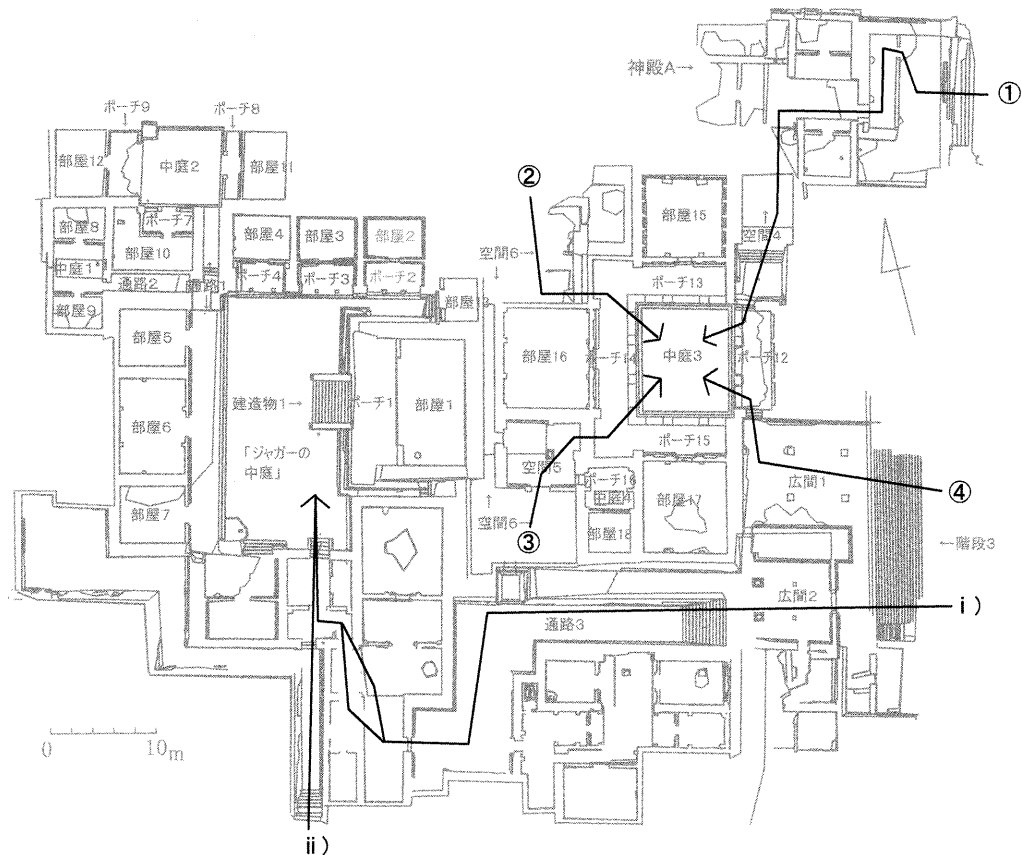


図 14 宮殿 3 における「ケツアルパパロトルの宮殿」および「ジャガー・コンプレックス」への推定アクセスルート

する広い入口を構え、四隅にアクセス・ルートを持つ開かれた空間で、例外的に石影を使用し続けていた。以上述べてきた点から、「ケツアルパパロトルの宮殿」は、儀礼や政治など公的な目的に使用された空間なのではないかと推測される。

他方、南のコンプレックスや「羽毛の生えた巻貝の神殿」群、ジャガー・コンプレックスへのアクセスは、i) 階段 3 を昇って広間 2 を抜け、通路 3 から回る東ルートと、ii) 南側で唯一の入口から進入する南ルートとの 2 つである (図 14 参照)。第 III 期まで容易であった「月の広場」から「ジャガーの中庭」へのアクセスは、第 IV 期の「ケツアルパパロトルの宮殿」の建設以後「南のコンプレックス」を通過しなければならなくなり、「月の広場」とは隔絶されたと考えられる。VI 期には「ジャガーの中庭」中央の基壇もなくなり、アクセスの変化により狭い入口から出入することになった。さらに、南のコンプレックスでもアクセスの変化が起こった。通路 3 から南のコンプレックス西側への入口も、第 IV 期以降に切り石を積み上げて丁寧に閉鎖されたと推測される。この閉鎖により宮殿 3 の内部を通じて東西の往来ができなくなったことで、ジャガー・コンプレックスは閉鎖的空間に変化していったと考えられる。ジャガー・コンプレックスは、進入ルートが狭く少な

い上、入口からメイン・パティオまで離れていることから、住居としての要素が強かったと考えられる。

しかしながら、メイン・パティオに面した空間の構造や水源に注目すると、私的な空間としての機能性よりも、空間の構成が重視されていた可能性もある。一般にアパートメント式住居の場合、メイン・パティオにはそれぞれの方向に部屋あるいはポーチが一つ設けられるのが通例である。しかし、宮殿3のメイン・パティオにあたる「ジャガーの中庭」では、現在見られるものだけでも一面に3つの部屋が並んでいる。この配置はプライバシーを保つには開放的であり、少なくとも郊外にあるアパートメント式住居では見られない。また、アパートメント式住居は天井を葺かず、床には深さ10cmほどの溝のあるオープンスペースが多数見られる。マンサニージャによれば、これらの一部は雨水を集めるため、あるいはごみ集積や明かりを取るための空間として機能していた[Manzanilla 1993: 1, 33]。このような空間も、公的施設だったと考えられているヤヤワラ[Hopkins 1987: 383-384]やティトラ[Angulo 1987: 310-311]ではあまり報告されておらず、ジャガー・コンプレックスでは、中庭2の一ヶ所では確認されていない(図9参照)。これが水の確保の役割を担っていた場合、住居の空間全体に対する溝付きオープンスペースの比率は、他のアパートメント式住居に比べて少ない。これらの側面からは、「ジャガーの中庭」も公的施設であった可能性も考えうる。

「ジャガーの中庭」の機能については今後より多くのデータと比較していく必要がある。建築以外にもジャガー・コンプレックスの遺物のデータが発見されれば、さらに詳しく分析できるのではないだろうか。

#### 4. おわりに

以上見てきたように、宮殿3は、数百年の間にテオティワカンの中心地区で少なくとも5回の大きな増築を経験してきたことが明らかになった。その過程で建物は古い建物を覆いながら拡大し、宮殿東側では床面の高さが一気に4m上昇した。都市の中心地区に位置するアパートメント式住居は、外壁や道路などの区画という点で郊外型のアパートメント式住居とは異なっていた。宮殿3では、住居の空間自体が拡張する現象も見られた。

アクセスを検討してみると、宮殿3西側のジャガー・コンプレックスや「羽毛の生えた巻貝の神殿」群へ通じるアクセスはそもそも数が少なく、あまり大きく変化しなかったのに対し、宮殿東側では当初四つ角全ての方向から「ケツアルパパロトルの宮殿」へのアクセスが可能であった。アクセスからは、宮殿の東側は公的施設の要素が強く、西側は住居の要素が強いと考える事ができる。しかし、空間の構成で見ると、宮殿西側は他の住居と比べて解放された空間が広くプライバシーを保てる空間が少ない。その上、生活上多目的で使用されると推測されるオープンスペースも少ないことから、公的施設の可能性も考えうる。

壁面に注目すると、宮殿3の東側では第II期の「羽毛の生えた巻貝の神殿」の壁面に鳥が描かれ、別の建物が造られても、「ケツアルパパロトルの宮殿」の石彫として一貫して鳥のモチーフが見られる。一方西側は、「ジャガーの中庭」が第II期から第VI期まで使用されていた。いつからジャガーのモチーフが使用されるようになったかは不明であるが、現在ポーチ2には、建物と波形を



モチーフにした壁画が残されている。このモチーフの後にジャガーのモチーフが描かれたとすれば、第VI期に、宮殿西側ではジャガーと関わりのある集団、東側は鳥に関係する集団が活動していたと推測されるのである。

このように、空間の利用については、空間配置のような建築面だけではなく、イコノグラフィや遺物の資料の検討を含めたさらなる分析が必要であると考ええる。

本論文が示すように、建築に関する考古学データが不足している遺構でも、遺構の実地観察と組み合わせて用いることにより、CAD はひとつの建築物を通時的に復元することができる。CAD のデータは、他にもさまざまな分析に適用しうるものである。壁画や遺物の資料と組み合わせることで、空間の変遷や機能を多角的に検討することができる。このように、他の考古資料と照らし合わせながら空間分析を行なうための有効な手段として、CAD 分析を活用することができるのではないだろうか。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教官である杉山三郎教授をはじめ、愛知県立大学の稲村哲也教授、村上達也氏、古手川博一氏から貴重なアドバイスをいただいた。また編集事務局の方々にも大変お世話になった。この場を借りて御礼申し上げる。

## 註

- 1) アパートメント式住居はテオティワカン全域で広く見られる住居で、60m×60m を標準の大きさとする。アパートメント式住居は、平屋建て家屋が連なったような集合住宅で、外壁は厚い壁で囲まれている。区画内には広い中庭を中心とした複数の部屋やポーチ、また神殿や祭壇が並ぶ。ひとつのアパートメント式住居には、数十から百を超える部屋があった。アパートメント式住居は、テオティワカン全体で 2000 戸以上存在していたと考えられている[Millon 1981: 208]。
- 2) このプロジェクトはメキシコ国立人類学歴史学研究所 (*Instituto Nacional de Antropología e Historia*)、愛知県立大学、アリゾナ州立大学 (*Arizona State University*) の合同プロジェクトで、杉山三郎とルベン・カブレラ (*Rubén Cabrera Castro*) が共同団長を務める。現地調査は 1998 年より継続して行なわれており、文部科学省・日本学術振興会、アメリカ合衆国の国立科学研究基金 (*National Science Foundation*)、ナショナル・ジオグラフィック協会 (*National Geographic Society*)、アリゾナ州立大学から助成金を受けている。
- 3) 光波式測距測角機。平板測量とトランシットを組み合わせてデジタル化させた機能を持つ。プリズムと呼ばれる鏡のような目標に焦点を合わせて光波を出し、三次元座標を計測できるほか、角度も計測できる。その上、計測したデータをコンピュータに移すことができ、アナログ測量に比べて利便性や加工のしやすさが格段に向上した。
- 4) 新築や拡大など、大規模な変化を伴う建築の変遷の段階を示す。
- 5) アパートメント式住居の典型的な建築形態のひとつである。アパートメント式住居の中には複数の中庭があるが、その中でもっとも大きな中庭 (=メイン・パティオ) に神殿など重要な建物を造り、その中央に祭壇を建てることが多い。この建築形態は、トラミミロルパ期以

降に建てられたアパートメント式住居に非常に多く存在する。

- 6) 複合体は、アパートメント式住居と同様の間取りであることが多いが、中心地区に見られる建物で、アパートメント式住居のように規格に則った形ではない。マヤの場合、宮殿はエリート階層の住居やひとつの都市に一ヶ所しかないが、テオティワカンの場合、慣例的に比較的広い間取りの建物を宮殿と呼んでおり、明確な線引きはない。これまでの研究ではアパートメント式住居以外に「宮殿 (*palacio*)」や「複合体 (*conjunto*)」と名のつく住居も、アパートメント式住居の枠中に含んでいることが多い。
- 7) フィールドワークは、公式には 1960 年 1 月に開始され、1964 年 9 月に終了したことから、1960-1964 年のプロジェクトとも呼ばれる。特に 1962 年 9 月から開始した第 4 次調査からは政府から大型の資金援助があり、同時にその時から公式なプロジェクト名もテオティワカン・プロジェクトとなった。そのため、1962-1964 年プロジェクトと呼ぶ場合もある。主に「月のピラミッド」や「死者の大通り」沿いの建造物など、都市中心部の発掘・修復に重点を置いていた。同時に、テティトラやラ・ベンティージャなど郊外のアパートメント式住居も発掘している。
- 8) ミロンらロチェスター大学によるテオティワカン・マッピング・プロジェクトは、テオティワカン盆地全体の正確な図面の作成と、テオティワカンの都市の境界を探るための表面採集、および小規模な発掘を目的として、1962 年 6 月から調査を開始した。図面は航空写真を基に、1:2000 の詳細地図とテオティワカン盆地全体が一枚に収まった図面の 2 種類を作成した。このプロジェクトでは、「シウダデラ」の南西角付近の一点を東西に伸ばし、「死者の大通り」の中心軸と交差する地点を 0 地点 ( $X=0, Y=0, Z=2275.950$ ) として、テオティワカン盆地全体を 500m ごとの格子状に分割していった[Millon 1973: 13]。
- 9) 各所の名称は 1960 年代の分類を参考にして[Acosta 1964; Miller 1973]、筆者が付けたものである。なお「羽毛の生えた巻貝の神殿」群は「ケツァルパパロトルの宮殿」の下に位置するため、本論中では前者の建築物は下層建造物と呼んでいる。
- 10) 盗掘跡の東端で中庭 3 の東側階段の辺り、深さ 4.53m のところで発見された[Acosta 1964: 32]。
- 11) 低い斜めの壁面のこと。その上に、タルーの約 2 倍の高さを持つ垂直壁 (タブレロ) が組み合わせられたものが、タルー・タブレロ様式である。
- 12) 太い木材の一部を建材として使用する場合、木材の中心部を使用すると、伐採年よりも古い年代を示す[中村 2003: 310]。

## 参考文献

Acosta, Jorge R.

1964 *El Palacio del Quetzalpapalotl*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

1967 Una clasificación tentativa de los monumentos arqueológicos de Teotihuacan. In *Onceava Mesa Redonda de Teotihuacan*, pp. 45-56. Sociedad Mexicana de Antropología, México, D.F..

Angulo V., Jorge

1987 Nuevas consideraciones sobre los llamados conjuntos departamentales especialmente Tetitla. In

*Teotihuacan: nuevos datos, nuevas síntesis, nuevos problemas*, edited by Emily McClung de Tapia and Evelyn Childs Rattray, pp. 275-316. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Carballo, David M.

2005 *State Political Authority and Obsidian Craft Production at the Moon Pyramid, Teotihuacan, Mexico*. Unpublished doctoral thesis, Department of Anthropology, University of California, Los Angeles.

De la Fuente, Beatriz(editor)

1995 *La pintura mural prehispánica en México I: Teotihuacan*. 2 vols. Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F..

Gomez C., Sergio

2000 *La ventilla un barrio de la Antigua ciudad de Teotihuacan*. 3 vols. Tesis profesional para la licenciatura entregada a la Escuela Nacional de Antropología e Historia. Instituto Nacional de Antropología en Historia y Secretaría de Educación Pública, México, D.F.

Hopkins, Mary R.

1987 An Explication of the Plans of Some Teotihuacan Apartment Compound. In *Teotihuacan: nuevos datos, nuevas síntesis, nuevos problemas*, edited by Emily McClung de Tapia and Evelyn Childs Rattray, pp. 369-388. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F..

Jarquín P., Ana María and Enrique Martínez V.

1982 *Informe final de los trabajos de excavación efectuados en el conjunto 1D (Zona Habitacional Norte del Templo de Quetzalcoatl:Frente 7*. Archivo Técnico del Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F..

Kubler, George

1984 Renascence y disyunción en el arte mesoamericana. *Cuadernos de arquitectura mesoamericana 2*: 75-87.

Linné, Sigvald

1934 *Archaeological Researches at Teotihuacan, Mexico*. Ethnological Museum of Sweden, Stockholm.

1942 *Mexican Highland Cultures: Archaeological Researches at Teotihuacan, Calpulalpan, and Chalchicomula in 1934-1935*. Ethnological Museum of Sweden, Stockholm.

Lombardo De R., Sonia

1995 El estilo teotihuacano en la pintura mural. In *La Pintura Mural Prehispánica en México I: Teotihuacan*, tomo II: estudios, coord. by Beatriz de la Fuente, pp.3-64. Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Manzanilla, Linda

1993 *Anatomía de un conjunto residencial teotihuacano en Oztoyahualco*. 2 vols. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

1996 Corporate Groups and Domestic Activities at Teotihuacan. *Latin American Antiquity* 7(3): 228-246.

2004 Social Identity and Daily Life at Classic Teotihuacan. In *Mesoamerican Archaeology: theory and*

*practice*, edited by Julia A. Hendon and Rosemary A. Joyce, Blackwell Publishing, Oxford.

Miller, Arthur G.

1973 *Mural Painting of Teotihuacán*. Dumbarton Oaks. Washington, D.C.

Millon, Clara

1972 The History of Mural Art at Teotihuacan. In *XI Mesa Redonda de Teotihuacan*, pp. 1-16, Sociedad Mexicana de Antropología, México, D.F.

Millon, René

1970 Teotihuacan: Completion of map of giant city in the Valley of Mexico. *Science* 170: 1077-1082.

1973 *The Urbanization at Teotihuacan, Mexico, Vol. 1: The Teotihuacan Map*, Part 1. University of Texas Press, Austin.

1981 Teotihuacan: city, state, and civilization. In *Handbook of Middle American Indians, Supplement 1: Archaeology*, edited by Jeremy A. Sabloff, pp. 198-243. University of Texas Press, Austin.

1988 The Last Years of Teotihuacan Domination. In *The Collapse of Ancient States and Civilizations*, edited by N. Yoffee and G. L. Cowgill, pp. 102-64. The University of Arizona Press, Tucson.

Morante L., Rubén B.

2002 Astronomía civil y astronomía ritual en Teotihuacan. In *Ideología y política a través de materiales, imágenes y símbolos: Memoria de Primera Mesa Redonda en Teotihuacan* edited by María Elena Ruiz Gallut, Instituto de Investigaciones Antropológicas and Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Müller, Florencia

1978 *La Cerámica del Centro Ceremonial de Teotihuacán, México*. Instituto Nacional de Antropología e Historia y Secretaría de Educación Pública, México, D.F.

Muñera, Carlos

1991 *Una representación de bulto mortuario*. In *Teotihuacán, 1980-1982: nuevas interpretaciones*, edited by Rubén Cabrera Castro, Ignacio Rodríguez García and Noel Morelos García, pp. 335-343. Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico, D.F.

中村俊夫

2003 「年代学と考古学」, 松井章編『環境考古学マニユアル』, pp.301-322, 同成社.

Rattray, Evelyn C.

1997 *Entierros y ofrendas en Teotihuacan: excavaciones, inventario, patrones mortuarios*. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

1998 Resumen de las tendencias cronológicas en la cerámica y panorama general de Teotihuacan. In *Los ritmos de cambio en Teotihuacan: reflexiones y discusiones de su cronología*, pp.255-275. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Rattray, Evelyn C. and Magalí Civera C.

1999 Los entierros del barrio de los comerciantes. In *Prácticas funerarias en la ciudad de los Dioses*, edited by Linda Manzanilla and Carlos Serrano, pp. 149-172. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Sánchez A., José Ignacio

2000 *Las unidades habitacionales en Teotihuacán: el caso de Bidasoa*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Sanders, William T.

1967 Life in a Classic Village. In *Onceava Mesa Redonda de Teotihuacan*, pp. 123-148. Sociedad Mexicana de Antropología, México, D.F.

Sarro, Patricia Joan

1991 Role of architectural sculpture in ritual space at Teotihuacán, México. *Ancient Mesoamerica* 2(2): 249-262.

Séjourné, Laurette

1966 *Arquitectura y pintura en Teotihuacan*. Siglo XXI, México, D.F.

Sugiyama, Saburo

1993 Worldview materialized in Teotihuacan, Mexico. *Latin American Antiquity* 4: 103-129.

杉山三郎

2001 「テオティワカンにおける権力と抗争」『古代文化』 vol.53, pp. 3-16

Sugiyama, Saburo y Rubén Cabrera C.

2003 *Informe del proyecto piramide de la luna: la quinta temporada 2002, y el proyecto de la sexta temporada 2003*. Archivo Técnico del Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

2004 *Informe del proyecto piramide de la luna: la sexta temporada 2003, y el proyecto de la septima temporada 2004*. Archivo Técnico del Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Von Winning, Hasso

1987 *La iconografía de Teotihuacan: los dioses y los signos*. Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

The Transition of a residential compound in Teotihuacan, Mexico:  
An analysis of the construction in the Palace 3  
through the 3D survey data.

Yuko Koga  
(Aichi Prefectural University)

Key words: Teotihuacan, apartment compound, Palace 3, CAD-analysis, access

The Palace 3 is one of the residential compounds located in the southwest corner of the Moon Plaza, Teotihuacan. It was excavated and consolidated by a Mexican Government Project in 1960's. The structures revealed are those currently called "Quetzalpapalotl Palace," "Feathered Shell Temple," "Jaguar Patio," and "South Complex." The structures show evidence of the complicated rebuilding process of an extended apartment complex. Previous systematic architectural studies have not, however, been carried out based on precise maps and detailed excavation data. One of the main programs of the Moon Pyramid project is to rectify this situation through an intensive architectural survey of the Moon Plaza complex including a precise 3D architectural map. This work is based on Total Station survey data, CAD reconstruction and the observation on the structures. Herein is examined the architectural layers and spatial analyses of this complex, showing the utility of this CAD analysis.

It was discovered that there were at least eight overlapping architectural levels: six principal ones - which we call here, from the earliest to the latest, levels 1 to 6 - with two minor additional levels. In this process, the east side rose more than 4 meters, and "Jaguar Patio" diminished from 100% in the Level 2 to 37% in the Level 6.

Excavation data is still lacking such that it is difficult to situate the activities of the Moon Plaza temporally. The information of INAH's extensive excavations in 1960's suggests that highly ranked socio-political entities lived in nearby residences including the Southwest Complex. The access ways to the Palace 3 show us that the east side and the west side were the same complex in the beginning of its history. Later, these changed as the two separated and developed into constructions with disparate functions without direct access between them. At the same time, expressed in murals and sculptures throughout the construction history, bird-centered symbolism on the east side and jaguar-centered symbolism on the west side can be readily seen.

原稿受領日 2004年12月11日

採択決定日 2005年06月23日